

こどもの新型コロナウイルス感染

飛騨市民病院 小児科/ICD (医学博士) 中林玄一

新型コロナウイルス感染の流行から1年3ヶ月ほどが経過し、ウイルスについて判明したことも多くなりました。本日は“こども”に焦点を当ててお話しさせていただきます。

ウイルスの感染は「スプレッダー」と呼ばれる「周囲にうつしやすい」方によって起こりますが、新型コロナウイルスの場合は「感染者全体のおおよそ10人に1人」と言われています。しかし、これまでの知見では「小児における割合はずっと少ない」ため「こどもは周囲に感染させにくい」と言われています。理由として、子どもの肺には「ウイルスが体に侵入し、増殖するために必要な細胞表面の突起であるACE2レセプターが少ない」ことなどが影響していると言われています。自分としては他にも「身長の高さで下から上には飛沫拡散しにくい」ことや「子ども同士が対面して長時間会話しなない行動パターン」など、複数の行動様式が影響している可能性も関係しているのではないかと推察しています。しかし小児は「うつしにくいだけで、感染しないわけではない」ため、大人と同様に「やはり予防は大切」です。小児における予防のうち「マスクの装着は2才未満においては有用性より不利益の方が上回る」とされて推奨されていませんので、むしろ周囲の大人がマスクを含めた予防に努めることを推奨されています。

後遺症につきましては、徐々に「若年でも決して少ない割合では無い」と分かってきており注意が必要です。またネコを使った感染実験でも「完全に無症状の感染した肺においても大きなダメージを受けている」ことが判明するなど、「できるだけかからない方がよい」という証拠が次々と出ていますので、今後も適切な予防活動を継続しましょう。

さて季節は春ですが、これからむしろ「ウイルスの感染力が増大」することを懸念しています。くしゃみを誘発する花粉症や、黄砂(PM2.5)による肺の炎症レベル上昇によるACE2レセプターの増加、そして温かくなることで活発になる人事交流や、年度行事・会社行事による接触機会の上昇、など沢山の要因が挙げられます。また感染対応が長期化する中においては、すでに「1年以上にわたって小児の一般的な呼吸器感染症の流行が途絶えている」ことから、今後は市中の獲得免疫レベルが流行に関連する種々のウイルス感染症、例えばRSウイルスやインフルエンザをはじめとする感染が「防疫活動の緩み」で一気に大流行することも懸念されます。一般感冒であっても、花粉症と同様に、くしゃみ・咳などの症状によって飛沫が広範囲に拡散しやすくなり、「新型コロナウイルスも広がるリスク」が増大します。また「一般感冒だと思っていたら新型コロナだった」という状況も生まれやすくなり、森に紛れた一本の小枝のように、市中で新型コロナが隠れて存在し続けやすい環境になる可能性も考えられるため、1年前よりもさらに注意が必要になると考えています。

そういう状況において、家庭内や小集団において、新型コロナのクラスターを早期に発見するざっくりとした目安として、大人とこどもの流行パターンの違いに着目する方法があると思っています。通常感冒の広がり方は、「子どもが園や学校などでもらってきた感冒に、一部の大人が感染する」順で起こりますが、新型コロナでは子どもは無症状の事が多いため「子どもは無症状か軽症だが、大人が先にかかっ

て広がっている感冒症状」になることが多くなります。このため「高齢であったり基礎疾患のある大人が感冒症状（たとえ最初は軽症で発熱がなくても）を示しているのに、子どもがけろっとしていたらピンとくる」という姿勢で病院への相談を行う事が有用と考えられます。これは受診の際にも伝えましょう。

なお最近「変異株」による小児が関与する感染事例も発生するようになりました。これまでスプレッダーとなる心配は少ないとされてきた小児においても、今後は「感染させる側になる」という可能性が上昇する点にも配慮が必要となりそうです。

最後に、心の不調を訴える子どもが全国的に増加しています。「新型コロナでメンタルを崩して受診しました」という方はおられず、「漠然と調子を壊して不登校などで受診」されます。他者との関係が断たれ、メディアでは常に不安になる情報が流れ、親をはじめ人々も「将来の心配」を話している状況が影響していないわけがありません。ぜひご家庭では「大丈夫！過去にも同じようなことは繰り返されてきたけど世界は終わってないでしょ。いつか必ず収束するから、その時のために元気でいようね！」と声をかけてあげてください。